



#1

地域とであらう

ちまた公民館 / ちまたトーク

2023年10月に居場所づくりの実験事業として始まった「ちまた公民館」。現在は浜松市中心部紺屋町に10坪の拠点を構え、私設私営の公民館として運営している。この1年半で、近所の小・中学生から、浪人生、はたまた居場所を求めて遠方から来館する人まで、様々な人が交差し出会う場所となった。さらに今年度は「ちまた公民館は場所ではなく、活動である」というコンセプトのもと、特定の場所に縛られず、協働センター、看護学校、浜松リノベーションフェス、渋谷ヒカリエといった場所で「出張ちまた公民館」事業を展開した。また浜松国際交流協会 HICE や JICA 浜松デスクとのコラボ事業や地元のアーティストが講師になる「ちまたスクール」を開催するなど、多くの団体と協働できたのが今年度の特徴だ。今後は今ある「ちまた公民館」の土壌を育てながら、地域活動支援センター化を目指して拠点を拡大し、今年度出会った関係や事業を発展させていきたいと考えている。

2.1の練習形式
日常
ゆつくりな暮らし
宿題

常に変化している
（人から変わる、その日その日）
その日の環境、その日いる人たち
つらさ

④ ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩
→ 近隣住民とつながりやすい生活の一部になる。
→ 新しいことが苦手な人は少しづつ慣れさせていく
→ 土曜の空気が固まってしまうことがある

ちよと密な
11人
あしんり
作業

近隣住民
外国人
生活困難
何か相談したい人
たのしみは
アリのこと？
たのしみもつかえるよ

通れる
近隣の人
小学生
中学生
自治会
糸井屋町
2-3-3-179

ちまたスクール
講座
地元アーティスト
もたはなはなと
みこととの出会い

あしんり
よこるま
たのしみもつかえるよ

居場所
フリースペース
失敗



「おはよう」
「こんにちは」
「おはよう」
「こんにちは」

出張
看護学校
超福祉の学校
凸凹まっつ
とまにのりたけ
学芸にたまる...
カニアリに入
おこみだり
糸井とつと
とまにのりたけ
おこみだり

あしんり
よこるま
たのしみもつかえるよ

失敗
「おはよう」
「こんにちは」
「おはよう」
「こんにちは」

「おはよう」
「こんにちは」
「おはよう」
「こんにちは」

「おはよう」
「こんにちは」
「おはよう」
「こんにちは」

あしんり
よこるま
たのしみもつかえるよ

時にふらふら、カットするコトも...
「もも」で「まもり」で「な」
「な」で「まもり」で「な」
「な」で「まもり」で「な」
「な」で「まもり」で「な」

6 だま、と「な」なる??!!
リニューアルオコニ!!
地域活動支援センターモ!!!

「おはよう」
「こんにちは」
「おはよう」
「こんにちは」

「おはよう」
「こんにちは」
「おはよう」
「こんにちは」

ちまた公民館 年間スケジュール

日付	イベント
4月1日	出張ボードゲおじさんのボードゲーム会
	プラモデルをつくる会
4月8日	プラモデルをつくる会
4月11日	ミドのヴぁ
4月13日	じゅんこさんの銅版画講座
4月15日	朝鮮・韓国語講座 교차점
	プラモデルをつくる会
4月22日	はじめてのラジコンどうでしょう?
	プラモデルをつくる会
4月26日	ギャル部
4月27日	じゅんこさんの銅版画講座
4月28日	レクリエーション交流会
5月2日	ギャル部
5月6日	出張ボードゲおじさんのボードゲーム会
	かたりのヴぁ「あだ名に変わる時」 進行役:夏目はるな(レッツスタッフ)
	プラモデルを作る会
5月9日	ミドのヴぁ
5月11日	じゅんこさんの銅版画講座
5月13日	プラモデルを作る会
5月20日	『増補 ためらいの看護』読書会(ゲスト:西川勝さん)
5月21日	かたりのヴぁ「たまたま、ひよんな、偶然とどう付き合うか?」 進行役:西川勝(臨床哲学者、元大阪大学コミュニケーションデザイン・センター特任教授、現在は NPO ココペリ 121 理事)
5月25日	じゅんこさんの銅版画講座
5月27日	はじめてのラジコンどうでしょう?
	プラモデルをつくる会

5月31日	朝鮮・韓国語講座 교차점
6月3日	伊藤家のゲームの食卓
6月8日	じゅんこさんの銅版画講座
6月10日	ギャル部
	プラモデルを作る会
6月12日	かたりのヴぁ「服を着ること」 進行役:塚本千花(レッツスタッフ)
6月13日	ミドのヴぁ
6月17日	プラモデルを作る会
6月21日	朝鮮・韓国語講座 교차점
6月22日	じゅんこさんの銅版画講座
6月24日	タテシ関光プレゼンツ 社長の町あるきツアー
7月1日	かたりのヴぁ「価値とはなんぞや」 進行役:松本利浩(ラジコンおじさん)
	プラモデルをつくる会
7月3日	積ん読本どくしょ会
7月5日	レクリエーション交流会
7月7日	Poetrycalも〜めんと
7月10日	積ん読本どくしょ会
7月13日	じゅんこさんの銅版画講座
7月14日	Poetrycalも〜めんと
7月15日	夏の縁日
	プラモデルをつくる会
7月19日	アロマ講座
7月21日	Poetrycalも〜めんと
7月24日	積ん読本どくしょ会
7月26日	アロマ講座
7月27日	じゅんこさんの銅版画講座

7月28日	Poetrycalも～めんと
7月29日	プラモデルをつくる会
7月31日	積ん読本どくしょ会
8月2日	朝鮮・韓国語講座 교차점
8月4日	Poetrycalも～めんと
8月5日	プラモデルをつくる会
8月7日	積ん読本どくしょ会
8月9日	水曜宿題マン！
8月10日	じゅんこさんの銅版画講座
8月16日	朝鮮・韓国語講座 교차점
8月18日	かたりのヴぁ『自分』を感じる時 進行役:尾張美途(レッツスタッフ)
8月19日	ガチャふえす！ プラモデルをつくる会
8月21日	積ん読本どくしょ会
8月23日	水曜宿題マン！
8月28日	積ん読本どくしょ会
8月30日	絵本講座
9月1日	積ん読本どくしょ会
9月2日	かたりのヴぁ「かたつむりのベース」 進行役:ササキユイチ(レッツスタッフ)
9月6日	朝鮮・韓国語講座 교차점
9月8日	積ん読本どくしょ会
9月13日	水曜宿題マン！
9月14日	じゅんこさんの銅版画講座
9月15日	積ん読本どくしょ会
9月20日	朝鮮・韓国語講座 교차점
9月22日	積ん読本どくしょ会

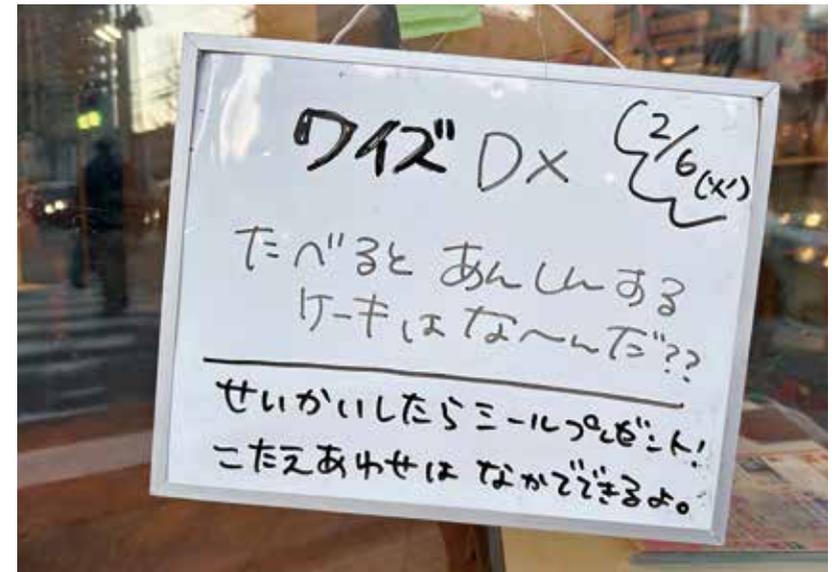
9月27日	水曜宿題マン！
9月28日	じゅんこさんの銅版画講座
9月29日	積ん読本どくしょ会
9月30日	たっぷりイベント9月の本性をつきとめろの会
10月4日	水曜宿題マン！
10月12日	じゅんこさんの銅版画講座
10月16日	かたりのヴぁ「言葉にする」 進行役:佐々木 知里 (元レッツスタッフ・現ご近所さん)
10月20日	積ん読本どくしょ会
10月21日	プラモデルをつくる会
10月25日	水曜宿題マン！
10月26日	じゅんこさんの銅版画講座
10月27日	積ん読本どくしょ会
11月4日	かたりのヴぁ「わたしの居場所 あなたの居場所」 進行役:水越雅人(レッツスタッフ)
11月9日	じゅんこさんの銅版画講座
11月15日	水曜宿題マン！
11月22日	朝鮮・韓国語講座 교차점
11月22日	水曜宿題マン！
11月29日	朝鮮・韓国語講座 교차점
12月6日	絵本講座 世界のダンス体操 『ペルーの健康ダンスでウノ・ドス・トレス！』 講師:ホセ・カルロス(出張ちまた公民館@クリエート浜松)
12月9日	タテイシ関光プレゼンツ 社長の路地裏観光ツアー
12月11日	かたりのヴぁ「やさしいってなんだろう」 進行役:塚本千花(レッツスタッフ) ドキュメンタリー映画上映会/桑山篤さん
12月12日	世界のダンス体操 『英語を使ってダンス！ラテンリズムで心もからだもエクササイズ』 講師:マギタ・アルベス(出張ちまた公民館@クリエート浜松)

12月13日	水曜宿題マン！
12月14日	じゅんこさんの銅版画講座
12月15日	書く語る 演劇ワークショップ
12月16日	クリスマス&忘年会 アロマ講座
12月20日	書く語る 演劇ワークショップ
1月10日	朝鮮・韓国語講座 교차점 書く語る 演劇ワークショップ
1月11日	じゅんこさんの銅版画講座
1月13日	新春！ちまたスクール2024 講座①「枝からフォークをつくる」 講師：宮沢のりこ(小枝デザイナー) これからちまたパーティ 共催：浜松国際交流協会HICE、JICA浜松デスク 協力：浜松市社会福祉協会
1月17日	水曜宿題マン！ 書く語る 演劇ワークショップ
1月19日	バリバラ (SHOW-1グランプリ)の DVDを観よう
1月24日	朝鮮・韓国語講座 교차점 書く語る 演劇ワークショップ
1月27日	新春！ちまたスクール2024 講座②「はりこでつくる縁起物」 アドバイザー：遠州天狗屋 坂田吉章
1月31日	水曜宿題マン！
2月7日	朝鮮・韓国語講座 교차점
2月8日	じゅんこさんの銅版画講座
2月14日	水曜宿題マン！
2月17日	新春！ちまたスクール2024 講座③「スマホ&iPhoneで気軽に曲づくり」 講師：Motomitsu Maehara (DJ、音楽家、絵本作家)
2月22日	じゅんこさんの銅版画講座
2月24日	羊毛フェルトワークショップ おひなさまリースをつくろう

出張ちまた公民館 年間スケジュール

日付	出張場所(イベント)
10月6日	クリエート浜松
10月11日	クリエート浜松
10月14日	お祭りごっこ！～みんなでつくる凸凹まつり～
10月18日	クリエート浜松
10月23日	クリエート浜松
10月27日	渋谷ヒカリエ(超福祉の学校@SHIBUYA)
10月30日	クリエート浜松
11月1日	クリエート浜松
11月8日	クリエート浜松
11月14日	クリエート浜松
11月18日	浜松市立看護学校
11月20日	クリエート浜松
11月27日	クリエート浜松
12月3日	浜松リノベーションフェスティバル
12月6日	クリエート浜松(世界のダンス体操)
12月12日	クリエート浜松(世界のダンス体操)
12月20日	クリエート浜松
1月5日	クリエート浜松
1月16日	クリエート浜松
1月23日	クリエート浜松
1月30日	クリエート浜松
2月5日	クリエート浜松(共生社会コンファレンス「ともにいるだけで学びになる～これからの協働センターはどうあるべきか、その可能性を考える」)
2月6日	クリエート浜松
2月13日	クリエート浜松
2月19日	クリエート浜松
2月27日	クリエート浜松







出張ちまた公民館@クリエート浜松 ふれあい広場

これからちまたパーティ@クリエート浜松





場づくりと地域づくり

「ちまた公民館は場所のことではなく活動である。」これが今年度いちばん考えたテーマだったと思います。現在ちまた公民館が活動している建物は、半年間限定の実験の場所でした。地域活動支援センターとしてリニューアルすべく引っ越し先を探しても見つからず、いつのまにやら同じ建物で1周年を迎えました。想定とは違う流れではあったものの、同じ場所で継続していくなかで生まれたもの、見えてきたこともたくさんあります。ずっと同じ場所にいるから周囲の人から徐々に認知されていく。人とのつながりをつくることは時間がかかるものです。ちまた公民館の目指す「だれでもつかえるばしょ」をいろんなところで開いていくこと、それは一つの場所にこだわる必要はありません。むしろいろんなところで展開していくと、今までなかった面白い場所ができるかもしれません。しかし住民にも利用してもらえる地域に根ざした場所にしたいとなれば、活動拠点を移動することはその地域から離れるということにもなります。場づくりとまちづくりは同じ延長線上にありながら、人や場所を問わず考え方を模索するのか、物理的な場所を起点に活動するのかで大きな違いがあるなと思います。ちまた公民館は両方の側面を持っている活動だと考えています。いまのちまた公民館には近隣住民がくるかとい

えばそうでもなく、徐々に地域に馴染んできているのかなと感じています。でも地域住民以外がいてもいいとも思います。誰でも安心してつかえる地域に根付いた場所、引き続き考えていきます。

居場所

自分の「居場所」、みなさんにはありますか？特にない、必要がないという人もいるかもしれません。家、学校、職場、カフェのような場所であったり、もしくは人や活動を居場所と感じることもあるかもしれません。居場所をうまく見つけて利用している人もいます。公園、公共施設、カフェ、習い事などなど、意識していなくてもなんとなく落ち着ける場所を誰しも持っているのだと思います。しかし居場所がないと感じる人ももちろんいます。家以外、学校や職場以外の生活の中のもう一つの居場所。もしくはいくつもあってもいいのかもしれません。近年いろいろなところで多様な場所が開かれています。「ちまた公民館に来る人と、公園や図書館に来る人の違いは何だろう？」そんな問いを受けたことがあります。ちまた公民館には、だれかの存在を感じたり、誰かとおしゃべりしたり、それを目的に来る人がほとんどです。わいわいみんなで話すという日もあれば、あちこちで小さな輪ができては離れたり、その日の場所の雰囲気は来た人で変わります。



居場所をつくるのは一人では不可能です。そこにいるみんなで作る居場所、これは場所のことでなく考え方や過ごし方などの見えないものなのかもしれません。

ご自由にBOX

今年度からはじまった「ご自由にBOX」は、公民館の新しい目印になりました。寄付でもらったものを「ご自由に持ちください」と玄関先に置いたところ、たちまち噂が広まり、いまでは下校の道すがら毎日BOXをのぞいていく子もいます。文房具や紙、雑貨など寄付でもらったものを使い切れず、溜め込んでしまっていたことからあるスタッフがはじめたものでした。子どもだけでなく大人ものぞいていきます。誰かが持って来てくれたマスクパックは一瞬でなくなり、またあるときは逆にご自由にBOXに直接寄付を入れて行く人もいました。ちまた公民館のガチャガチャも「中に自分の作ったものをいれたい」という人が出てきましたが、ご自由にBOXでも同じようなことが起こっています。間接的な物々交換です。自分がBOXに入れたものがなくなって、誰かが持っていったのだと嬉しさを感じている人もいれば、ただ処分困るものを入れてる人もいるかもしれません。それでもこんな小さなことで生まれる交流やつながりに面白さを感じています。BOXの力はこれだけではありません。ご自由にBOXは雨の日は建物の中にいれておくのですが、ある日頑なに中に入ってこなかった下校途中の小学生がBOXを見るために中に入ってきたのです。彼らにとってすごく魅力的な箱になってい

るのだなと思いました。直接声をかけることが大事だと思っていましたが、物を通したりして間接的なお誘いの仕方もあるのだなと実感しました。

関わり方のいろいろ

ちまた公民館とそこに来る人たちの関わり方は人それぞれです。毎日来る人、たまに来る人、1回だけ来た人、中に入ってゆっくりしていく人、玄関先で話すだけの人、ガチャガチャを回しに来る人、外からのぞいていく人、イベントを開催する人、それに参加する人、定期的に寄付を持ってきてくれる人などなど…。中に入ってなにかしていただくが「関わり」ではないなあと感じています。全員が同じように仲良くなれるわけではないのと同じで、どんな場所も全員が同じように長い時間を心地よく過ごせるわけではありません。外から公民館の中をのぞいていくだけの人も、いつか中に入って来るかもしれません。(声をかけるとびゅっと逃げて行く人もいますが…驚かせてしまったかもしれませんね。)それぞれの心地よい関わり方が徐々に作られていき、常に関わり方も変化していきます。いろんな人がいて、いろんな関わり方があることで場が固まらずいられるのではないかなと思います。すごく面白かったのは、ペンを貸してほしいと女性が訪ねてきたことです。「一度来たことがあるんだけど、ここならペンがあると思って…」と入ってきました。ふらっとペンを借りられる場所ってたしかにすぐ思いつきません。いつでもペンを借りられる場所、ちまた公民館です。

いくひと、くるひと

活動を始めて1年半ほどが経ち「最近〇〇さんこないね。」なんて会話も聞こえるようになりました。新しい人が来ることもあれば、よく来ていた人が来なくなることもありました。店番も入れ替わりがありました。来なくなった人にとってここは心地よい場でなくなってしまったのかな、それはなぜかな、なんで来ないのかなと理由を考えてみたり。かと思えば「仕事忙しくてこれませんでした」とひょっこり顔を出す人もいます。顔見知り同士では久しぶりに会うと自然と近況報告をしたりしています。その様子を見て、なんとなくコミュニティができてきているのかなと思ったりもします。相手の連絡先は知らないけど、こ

こに来たらもしかしたら会うかもしれない間柄。そんな不確かな関係の知り合いも、あってもいいのではないかなと思います。いまでも、ネットや人づてに知ったと初めて公民館に来る人も週に数人はいます。そこから定期的に通うようになる人は多くありませんが、やはり関心を持っている人やニーズはあると感じています。最近来ないあの人も、同じ浜松市に住んでいれば、ばったり会うことがあるかもしれません。公民館以外で会うと変な感じかもしれませんね。今度いつ顔をあわせるかはわかりませんが、「〇〇さん元気かな」とふと思い出しては思いをはせてみる今日この頃です。

杉田可縫





なぜ「出張ちまた公民館」は 始まったのか

今年度始まった特徴的な事業の一つが「出張ちまた公民館」だ。場所にとらわれることなく、「ちまた公民館」をさまざまな場所で開いていく。クリエート浜松（公民館などが入る複合施設）、地域の看護学校、浜松リノベーションフェス、渋谷ヒカリエ「超福祉の学校」など、どんな場所でも「ちまた公民館」を開いていった。

なぜ、拠点があるのにわざわざ外に出張しようと思ったのか。それにはまず2つの理由がある。

ひとつは、場所の問題だ。当初の計画では、今の紺屋町の拠点は半年で出て、地域活動支援センターとして新たに大きな拠点に移る予定だった。しかし、浜松のまちなかに入れる物件が必死で探しても見当たらず、今の拠点で継続して事業を展開している。10坪とこぢんまりとした紺屋町の拠点はもちろんその小ささ故の利点はあるのだが、10人も入れればパンパン。開催できる講座にも制限が生まれる。もっと、広い空間で身体を動かしたり、新しい人と出会う機会を作りたい。そんなことを前から感じていた。

もうひとつは、コミュニティを開いたり閉じたりする実験をしてみたかった。1年半が経ちだんだんと顔馴染みが増えてくると、安心感や仲間意識が生まれる一方で、コミュニティが閉じがちになる。そこに必要なのは新しい風、つまり、出会いだと思った。

そこで、物件が見つからないならば、むしろ自分たちから外に出て、あらゆる空間で「ちまた公民館」をひらけばいいのではないか？という逆転の発想が生まれた。そうした中で生まれたのが「出張ちまた公民館」だ。どんな場所でも、「ちまた公民館」的な場を作ることができるように、机を並べてみる、ガチャガチャをおく、いつも来てくれるメンバーと作業する、カーペットを敷いて寝転んでみる、レッツの障害のあるメンバーと交わる、そんな試行錯誤をこの1年間行ってきた。

特に、10月からは浜松中心部にある「クリエート浜松」という協働センター（公民館）、浜松市文化振興財団、浜松国際交流協会（HICE）などが入った複合施設の1階にある大きな広場「ふれあい広場」を借りて、毎週1回13時～16時の間に「出張ちまた公民館」を開催した。実はクリエート浜松は浜松の人なら誰でも使ったことがあるであろう地域に根付いた施設だ。1階のふれあい広場横には、テーブルや椅子がたくさん並んでおり、高校生が自習していたり、おばちゃんたちのお喋り会が開催されていたり、まどろむ人がいたり、既に多様な人たちがそこにいる。そんな方々を横目に、「出張ちまた公民館」は毎週開催された。声をかけてくれたり、参加してくれる人も数名いた。またレッツの利用者も加わり、即興的に音楽セッションが生まれ、演劇的な空間が都度現れたの

は、今までにない「ふれあい広場」の使い方だったと後に館長さんに教えてもらった。

そんな活動を継続していると、クリエイト浜松に入っている様々な団体の職員さんが声をかけてくれ、次第に顔見知りになり、仲良くなっていった。そうした繋がりから、生まれたのが浜松国際交流協会 HICE と JICA 浜松デスクとのコラボ事業である。浜松は日本の中でもブラジル国籍の方が多い国際都市だ。しかし、現実的にわたしたち日本人コミュニティと彼らの接点は多くはない。そんな中、HICE や JICA 浜松デスクさんとは障害、国籍、性差を超えたお互いが「いち個人」として出会える機会をつくる事業を開催しようと世界のダンス体操講座や新年を祝う「これからちまたパーティー」といった交流事業を展開した。特に1月頭に開催した「これからちまたパーティー」では、餅つきあり、インドダンスあり、音楽ありの150名が集う盛大なパーティとなり、浜松市社会福祉協議会・紺屋町自治会・河輪町餅つき奉行さんたち・ボランティアさん・HICE のメンバーと総計20団体の個人・団体が関わり、会を作り上げたのはクリエイト浜松史上、例を見ない事業だったという。何より、ちまた公民館に普段来るメンバー（小学生から大人まで）が、新しい出会いを前に緊張と高揚した面で、楽しそうに参加していたのは何よりの成果だった。環境が変わると、身体の開き方も変わる、そんな風にも感じた。

「出張ちまた公民館」は来年度も続け、大学や学校、公園など様々な場所を開拓するつもりだ。「ただいだけでいい」、そん

な空間を既存のスペースをハックし更新することで作り上げていく。それはもちろん、日々の「ちまた公民館」の日常があるからできる事業でもある。ハレとケ、両輪を動かしながら、「ちまた公民館」の未来をみてゆきたい。

久保田瑛

出張ちまた公民館 これからちまたパーティー

「新年だから餅つきやりたいですね!!」とはじまったこのパーティー、多くの方にご協力いただき無事に開催することができました。イベント当日はもちろん、開催準備までに多くのつながりができたことが今回のイベントを開催した大きな意味になったと思います。異文化交流新年会と題して共同企画したこのイベントでは、浜松国際交流協会（HICE）と JICA 浜松デスクの協力のもと、外国籍住民を中心に多くの参加者が集まりました。ちまた公民館に来る人たちも準備を手伝ってくれたり、会場に足を運んでくれたりとそれぞれにイベントへ参加していました。イベントがスタートし、会場の真ん中で始まるお餅つき、突如始まるポリウッドダンスタイム、おいしいお餅、飛び交ういろんな言語…不思議な空間でした。

浜松には多くの外国籍住民がいますが、日本の住民との交流の少なさや言語の壁によりサポートが受けられないなど、社会の中で孤立してしまうケースもあるそうです。障害福祉と国際交流は福祉的な活動というところで重なる部分はあっても、実際に協働することはいままでありませんでした。ひとつイベントとして形にできたことはお互いにとって大きな一歩だったと思っています。

そして影で支えてくれたのは浜松市社会福祉協議会でした。もち米の寄付の仲介、餅つきチームの紹介、当日の手伝いまで、

社会福祉協議会のまちづくりに対する思いとネットワークの強さを目の当たりにしました。また社会福祉協議会を通じて思いのある民生委員の方々と知り合うこともできました。石臼と杵はちまた公民館のある浜松市紺屋町の自治会にお貸しいただきました。思いも寄らないところで紺屋町での地道な活動が実を結んでいます。一見まとまりのないイベントのようにも見えますが、このご縁をどうつづけてつなげていくのか、ちまた公民館での日常と大きなイベントを地域づくりにどうつなげていくのか、今後の課題として今回知り合えたみなさんと考えていきたいです。

杉田可縫

『これからちまたパーティー』

会場：クリエート浜松 1 階ふれあい広場（静岡県浜松市中央区中区早馬町 2-1）

開催日：2024 年 1 月 13 日 [土] 17:00 ~ 20:00

共催：公益財団法人浜松国際交流協会 (HICE)、JICA 浜松デスク

★スペシャルサンクス★

いろいろな方を紹介してくれ、当日もお餅つきの準備片付け、見えない部分を支えてくれた 浜松市社会福祉協議会のみなさま
南区民生委員お餅つきチームのみなさま
お餅つき見学をさせていただいた河輪町のみなさま
もち米を寄付していただいた白脇田んぼアート会のみなさま
石臼ときねをかせていただいた紺屋町のみなさま
ちまた公民館でパーティー準備をお手伝いしていただいたみなさま
これからバディお手伝いスタッフのみなさま
当日会場ボランティアのみなさま
そして来てくださったみなさま



HICE × ちまた公民館コラボ 世界のダンス体操

コラボ事業を展開するにあたり、手始めに HICE で人気のある「世界のダンス体操講座」を出張ちまた公民館の枠で実施することになった。ダンス体操は、異国の文化を背景に持つ講師を迎えて一緒に身体を動かそうという趣旨のプログラムである。初回はホセ・カルロス先生による、ペルーのダンス体操。2 回目はマギダ・アルベス先生によるラテンリズムのエクササイズが実施された。

当日は HICE の知り合いの方、ちまた公民館によく来てくれる方、アルス・ノヴァのメンバーといった顔ぶれが参加し、たまたまふれあい広場に居合わせた人も、興味を持って覗きに來たり、輪に入ってくれた

りした。「間違えても気にしない！知らない国の音楽と動きを楽しみましょう」という講師の呼びかけを、率先して体現するアルス・ノヴァメンバーたち（彼らがここまで場になじんでいたのは、講座内容との相性の良さもあるが、これまでの出張ちまた公民館で場を開き続けてきた積み重ねもあるだろう）。それを見て、遠慮なく解放的に動く参加者たち。プログラムは HICE、空間はレッツ、と得意なところで役割分担した結果、予想以上の相乗効果が生まれたようだ。出会いの場としての「出張ちまた公民館」の、今後の可能性が期待できる企画となった。

塚本千花

『世界のダンス体操』

会場：クリエート浜松 1 階ふれあい広場（静岡県浜松市中央区早馬町 2-1）

「ペルーの健康ダンスでウノ、ドス、トレス！」

開催日：2023 年 12 月 6 日 [水] 13:30 ~ 15:00

講師：ホセ・カルロス・カセダ（介護福祉士）

「英語を使ってダンス！ラテンリズムで心もからだもエクササイズ」

開催日：2023 年 12 月 12 日 [火] 13:30 ~ 15:00

講師：マギダ・アルベス（ダンス・英語講師）

Youtube

「HICE × ちまた公民館コラボ 世界のダンス体操」 ▶▶▶



新春!! ちまたスクール 2024

2022年にオープンした「ちまた公民館」。「みんなの居場所」として活動を始めて、1年で利用者数が少しずつ増え、精神障害や発達障害のある方々を含む「常連」さんも生まれ、「居場所」としての土壌がつけられてきた。また、貸館として「ボードゲーム会」「手話講座」「演劇講座」など市民の方が主体となって、それぞれの特技・活動・文化を生かしたワークショップや講座が毎月開催された。

そして今回、「ちまたスクール（以下、ちまスク）」という名のカルチャースクールを実験的に開催した。ちまスクは、「出会い」を柱に4つのテーマがある。『障害のある方を含む市民の方々が「表現」と出会う』、『やったことのないことに出会う』、『身の回りの生活や地域と出会い直す』、『参加者同士が出会い、ともに時間を過ごす』だ。また、講師には市内在住で活躍するアーティストの方々をお願いをした。

開催してみると、小学生の子どもたち、高校生、高齢の方、精神障害のある方など多様な方々の参加があった。一方、公民館周辺地域からの参加は少なく、興味のある方々がエリア関係なく集まるイベントとなった。参加者からは、「今まで気になっていたので、チャレンジするのにちょうどいい機会だった」、「難しいというイメージがあったが、とても楽しくつくれた」、「参加者のみなさんがつくったものの話をきけ交流もできてよかった」といった感想があ

り、いい出会いをつくることができた。

「表現」は、自分の考えや価値観、文化を表出することができ、その過程で自然に自分と向き合う機会となる。ときに、居場所や逃げ場所になる。また、「表現」を介して他者との交流が生まれ、互いの違いを知ることができる。今回のちまスクでは「出会い」をテーマに開催したが、今後は、「出会う」とともに小さなコミュニティ形成や参加者の方々が交流する機会もつくっていききたい。

水越雅人

『新春!! ちまたスクール 2024』

会場：ちまた公民館

(浜松市中央区紺屋町 217-30)

【講座①】「枝からフォークをつくる」

開催日：2024年1月13日[土] 10:00～12:00

講師：宮沢のり子(小枝デザイナー)

対象：小学1年～どなたでも

【講座②】「はりこでつくる縁起物」

開催日：2024年1月27日[土] 10:00～12:00

アドバイザー：遠州天狗屋 坂田吉章(張り子作家)

対象：小学1年～どなたでも

【講座③】「スマホ&iPhoneで気軽に曲づくり」

開催日：2024年2月17日[土] 10:00～12:00

講師：Motomitsu Maehara

(DJ、音楽家、絵本作家)

対象：中学1年～どなたでも

#1 地域とであう

ちまちまトーク

column

「ちまちま」話すと だんだんコミュニティに繋がる？

新しいコミュニティを考えることは、大きく風呂敷を広げるのではなく、わたしたちが出会ってきていない、近くにいるけども話したことのない「隣人」たちと、まず、出会うことから始まるのかもしれない。そんな想いを胸に、今年度は浜松ちまた会議とレッツスタッフが、お話を聞いてみたい、知り合ってみたい、繋がりたい、浜松のまちなかに縁がある方に声をかけ、今のまちに対する思いや生活者としての目線をお聞きしながら、トークやちょっとした交流会を開催しました。

主催：浜松ちまた会議

共催：認定NPO法人クリエイティブサポートレッツ

支援：アーツカウンシルしずおか

菅沼映里さん（作業療法士）

2023年8月25日（金）

前から知り合いなのにきちんとお話を聞いたことがなかった菅沼映里さんに改めてお話を伺いました。まずはお話を聞いているときの何も足さない・何も引かない（たぶん）メモから公開！

映里さんのお話

<いまのしごとについて>

非営利の作業療法士のしごとが好き。一番好きなのは留学生の支援。静岡大学には、インドネシアや中国から来る留学生もいるが、主にインドの留学生の履歴書などの就職支援をしている。細かい相談も受けている。

医療機関では地域への働きかけに限界があった。医療機関では、まちづくり、人の関係をつくる、まちの温度感を上げていくということはあまりできない。

リカバリーは大学院の研究分野であり、やり続けたい仕事。

精神科のリハビリ領域に、アーユルヴェーダの知識を活かして精神・スピリチュアルと身体の実験分野のように離れていると考えられているところをつなげられたらと思う。

留学生は日本人と日常的に触れ合う機会が少ない。工学部に在籍していた留学生は数か月ゼミで話さなかったという例も。

事業としては、営利事業として、アンミカル（弁当惣菜業）、ケータリングを行っている。非営利＝外国人留学生支援、精神保健福祉の啓発、WRAPの普及啓発を行っている。

カレーは多くの人が関心をもつけれど、静大では食堂でのベジタリアンやハラール対応が限られているのが気になっていた。ベジタリアンやムスリムは食事の安全が心配だから、大学院の研究でみんな忙しくても自分でみんな手作りする。周囲が理解することで暮らしやすくなることも多いので、あえてハラールや外国人のことを紹介するような投稿をしている。

外国人がいる風景を当たり前にした。夜職務質問にあうとか、見た目判断されてしまう留学生がいる。本当は将来有望な「金の卵」なのに。ウェルカムな雰囲気をもっとあっていい。飲食店をベースに、もっとみんなが親しみやすくなるといいと思っている。

<これまで何をしてきたか>

最後はびあクリニックで、世界的に科学的根拠が認められたACT

(Assertive Community Treatment) というプログラムで訪問支援をするということをしてきた。チームで職域を超えながら、その人にいちばんベストなやり方を探るもの。作業療法士だけど何でもやった。ACTはいいプログラムで世界で認められているのだが、1年に1回評価も受けなければならないし、他の施設のACT適合度合も見なければならず規格が厳しい。リカバリーやストレングスモデルがしっかりしていて記録もそれに基づいてやるため、勉強になった。その人がその人らしく、のびのび生きるためにはどうすればいいか考えることをやっている。

<リカバリーとは！>

1980年代にアメリカで生まれた概念で、病気がよくなるのが本当の回復ではないんだと当事者がいいはじめて、良くなって何もなくなるのではなく、病気はありつづけるが自分らしく生きるとか、取り組んでいる過程自体が「リカバリー」なんだという考え方。イギリスやアメリカの精神保健福祉の政策目標は「リカバリーを目指しましょう」ということ。病気や症状に注目しない。私はそれを大学院のときに研究していてすごく好き。

<留学生のこと、インドのこと>

30人～50人の静大留学生と仲良くしている。兄弟や家族があとから来るので増えていく。修士、博士課程の間に、結婚、出産を経る場合もあり、卒業後は日本で暮らす人も多く長期化する傾向がある。

第三者返答、ということばが気になっている。支援者に向けてしか話してもらえない。介助者や支援者だけに話しかけるとするのは差別禁止法で書かれているのになくならない。それをなくしたい。

いろんな病院で精神科のお仕事をしてきた。インドが一番はじめの職場のときからで、ダブルキャリアでやり続けている。

<活動の中心は「リカバリー」>

重症の精神疾患→社会的に孤立してしまう。リカバリーが活動の中心。それはゴールではなく、変わっていく過程のこと。ひとりひとりが自分のウェルネスをよくしていく、自分で方向付けるもの。自分の可能性に到達できるように努力することができること。それをやる工程がリカバリー。

<ストレングスモデル>

できないことに着目するときりがない。重症であるほど取り付く島もない。医療者目線だと薬飲まないとかばかり目がいってしまうが、「何がで

きるか」に着目すること。自分がこうなっていきたい、どうすれば体調よくできるかを一緒に考えている。どんなときに調子がよくなるのか考えた「アラシさんのげんき計画」の例では、錯乱状態で1年くらい非同意入院したときにつくった。そのあと24時間テレビ見たいからと自ら入院するといういい傾向に！

<留学生の現状>

国は留学生をウェルカム。留学生受け入れ30万人を目指す！とっている。そのまま日本で働いてほしいという流れ。在留資格は取得しやすくなっていたり、永住権は若くて優秀でお金を稼いでる人はとりやすくなっている。自分が付き合ってるのは高度人材という優秀な研究者たち。日本の企業に勤めるには学業・JLPT(日本語の試験)・アルバイトの3本建てが基本。それに子育てしている人もいる。

<留学生のストレングス>

適応能力が高い。適応しないこともいい(ずっとインドの食事している、日本語しゃべらない人も)。横のつながりがすごく強い。家族のつながり。勉強して帰るんだという意思の強さがある。

<留学生へのサポート>

就労支援をしている。無料。むしろ企業からの事業委託をしてほしい。口コミ紹介制で履歴書づくり。留学生のPRの支援がとくい。志望理由のチェック。本人ならではのストレングスをまとめる。私も楽しい。英語はすごく難しいが、話をよくきけばわかる。日本人とどう仲良くできるかをよく聞いて書くと、日本企業は安心する。

<受診援助>

受診は大変。専門医受診が必要になった大学院生の家族。ベジタリアンで入院食食べられず。専門的な治療を受けるときに、訳すことも大切だが不安軽減、安心のためという意味もある。日本で子どもが生まれたが重症の脳性まひに。車がないのでタクシーで病院に行くためお金がかかる。車がないため、十分なリハビリが受けられていなかった。訪問リハビリ対象だと思い、受診同行、往診、訪問リハなどのサービス調整した。特別支援学校を視野にいた支援の必要性があった。母親が孤立しないよう同郷のお友達を紹介した。外国人のための相談支援事業所が必要かもしれない。

<リサイクル団体との橋渡し>

ピタゴラスとつないで生活支援。ストーブの使い方がわからないインド人もいる。短期滞在でも制服を買わなければいけないという問題。家財道具がない。英語が不得意な日本人でもコミュニケーションとしやすい支援。各種手続き。飲食店認可手続き。イベントやりたい(ベビーシャワー)人に公民館を紹介したり。市民のなかに溶け込んでうまくやるのが大事。職場以外での交流がないのをどうにかしたい。

<ヘルプユープロジェクト>

医療機関を探しやすくしたい! 県のサイト、市のサイト、医師会のサイトどれも探しにくい。「Hamamatsu, Child」で検索してノーヒットとありえないでしょ! HICEは手が回っていない、医師会は外国人増えたら困るとかいてる。経済界は外国人に住んでもらいたい。本当は行政がやるべき仕事。クラファン今月末までやってます! 外国人は日本語ゆっくりならわかる。医療従事者がGoogle翻訳とかつかって説明すればいいのに精神的バリアがある。LINE英語通訳をいれると、日本語いれれば通訳してくれる。使えることを知ってほしい。

<活動の根幹にあること>

リカバリーが私のなかで大切な考え方。本人がやりたいことへ支援するというのをすごく大事にしている。ピアサポート。ストレングス。カレー屋の存在をすることで、そういう人たちがいることを肯定的にして、生活支援は友人としても有償で専門でもやりたい

< WRAP の紹介 >

自分が錯乱状態になったときにどうするか、とか、どういう状態になったときに誰に委ねるかと考えて信頼できる5人に渡すというプログラム。日本で紹介されているが、新しいバージョンを翻訳している。自分もファシリテーターの資格をとったし、今後ファシリテーターを養成したい。誰が先生というより、対等人たちで生活の知恵をシェアする感じ。障害をもって人の親も参加できるし、いろんな人がやればいいと思う

<今後>

カレー屋アンミッカルは年明けに決めて、移転する。飲食店は利益率が低くて限界がある。ボランティア活動とか、おせっかいおばさんの活動、教育部門を強化していく。料理教室とか。カレー教室のほか、WRAPと

かアーユルヴェーダとか。ちまた公民館が近くにあるのも安心ポイント！

Q & A のじかん

Q. ACT の考えはもともとぴあクリニックにあったのか？

A. 新居昭紀先生、精神科医で聖隷三方原病院の院長だった。新居先生のととき日経メディカル病院評価で全国 No.1 になった。その結果、自分の足元の精神科病棟が管理的、閉鎖的になってしまった。定年退職したあと「にじのいえ」というのをつくって、ボランティアで訪問診療をたくさんした。ボランティアだと警察がらみになった場合、対応しきれないのでぴあクリニックを立ち上げた。ACT はあとで当てはめた。

アクトは他の施設を見学して適合度（フィディリティ）を評価する。忙しい中全国に出向くので大変。ACT は診療報酬の対象にならない。重たい人は 24 時間 365 日みなければならない。ACT みたいなサービスがどれぐらい必要か考えると、訪問ステーション的にどのぐらい必要か研究者が試算したらトヨタレンタカー店舗数ぐらい必要とか。ACT は長期入院者の退院支援にはつながらなかった。治療拒否とかには有効なんだけど、長期入院患者には向かない。ぴあクリニックから 3 回と訪問看護ステーションぽっけから 3 回、というふうにやっていた。いろんなやり方がある。

Q. ぴあクリニックって不思議な場所にあるなと思った。

A. たしかに集めちゃうという問題点もあって。どうしても病院や施設は障害者をあつめちゃう。最終的にどこの姿をみたいかというのは集める姿ではない姿をみたい。虹の家はもともと聖隷三方原病院の医師公舎だったのを活用した。病院ではなくただの居場所。訪問診療は 1 対 1 で、社会的な孤立から誰かと繋がる場所はない。孤立している人がいたら、速攻誰かをつなげる。それを外国人支援にも応用している。

映里さんは作業療法士なのだった

どうでしたか？情報量多くなかったでしょうか！？

お話を聞いて、カレー活動、外国人支援、精神保健福祉…、どれも映里さんのばらばらの活動だと思っていたけれど、実はそれは「非営利作業療法士」の活動であったという驚愕の事実には驚きを隠せない。

「リカバリー」「アクト」の関係がまだうまく理解できていないけれど、どうも根幹にあるのは「リカバリー」という考え方で、それを大きな柱としながら、外国人支援をしているということは目から鱗だった。ストレッチや横のつながりを作っていく福祉的目線を外国人へと応用していると

ころが本当にユニークだ。

公民館を外国人が使い始めた話、医療機関ではまちづくり、人の関係をつくる、まちの温度感を上げていくという話など、いまのレッツの活動に関係のある話ばかりだったが、それを「リカバリー」という理論の上において実践しているところに、理論的基盤のある強みを感じた。

映里さん、ありがとうございました！

夏目はるな

日下竜太さん（日下農園）

2023 年 9 月 8 日（金）

浜松市は北区、都田町。自然が多く、かつ道も整備されていて、子育て向き。そんな土地で温州みかん、ブルーベリー、アボカド等の生産販売をしている『日下農園』。三代目社長の日下竜太（くさかりょうた）さんにお話を伺った。

竜太さんは、都田出身のレッツスタッフ渡邊の幼馴染みでもある。わたしも以前、渡邊のすすめで、日下農園に遊びに行った。農園の敷地に設置された倉庫と直売所では、「サンサンマルシェ」というイベントを毎月第四日曜日に行っている。まだ始めたばかりの取り組みだということで、人はまばらだったけれど、青空の下、みかん畑の隣で美味しいものを食べたり、農園で働く人と話したりするのは気持ちが良く、トイレも綺麗で（ここ重要！）心地よい休日を過ごした。

竜太さんは、学校で機械科を専攻し、その後大手企業に勤めたが、給与の低さに衝撃を受ける。そして自分の給与は自分で決めたいという思いから、自営業であるご実家の農園を継ぐことに。でも、農家というのは、自分で作って農協に売る、というのが主なシステム。それで稼ぐことはできるけれど、竜太さんにとってのやりがいを見つけることは難しかった。そこへ、初代であるお祖父さんの話が影響をもたらす。

戦争を経験し、特攻隊へ行く予定だったお祖父さんは、行けずに生き残った自身のことを不甲斐なくて仕方がない、と評していたそう。そして「自分の命を日本のためにどう使うか」という理由から、みかん農園を始めたのだという。そんな初代のお話を直接聞ける機会は、四代以降は失われてしまうだろう。竜太さんは、「初代の志に触れながら長く農園を見る

ことのできる三代目は、重要なポジションではないか」と感じ、農協をやめて会社を興したり、人を雇ったり、様々なアプローチをもって、日下農園の基盤を固めていくことにしたという。

現在は、果物の仕入れ・生産販売を中心に、YouTubeの運営やマルシェの開催など様々なことに挑戦している。なかでも農業の話題を扱うYouTubeチャンネル『農業 JAPAN』は、登録者数一万人を越える人気コンテンツに成長。竜太さん自ら撮影・編集し、現在は週イチペースで投稿をしている。そのうち、農業関係者から、動画編集の仕事なども舞い込んでくるようになった。

YouTube効果は大きくて、動画を観て日下農園で働きたいという人が遠方から来てくれたり、農業で独立したいというひとが向学のためにやって来たりもする。日下農園では、新規就農者を応援しようという取り組みもして、自分で農業をやってみたいという方を研修で受け入れている。竜太さんは、「いずれ、日下農園を独立していった人たちが育てた作物を日下農園で売る、というような、ちっちゃな農協みたいなことをしたい」と語る。彼らが農業で儲かるように。

「農業、あんまり得意じゃない……」と、正直に語る竜太さん。生産部門は、栽培が得意な弟さんに任せ、竜太さんは営業を担当。そして現場を支えるのは、たくさんのパート職員。シーズンによる作業内容の振幅が大きい農業で、ある程度の人員を終年雇用をすることは、コスト的にも、やりがいの的にも維持が難しい。そこで、みかん以外にも単価の高い作物を扱ったり、マルシェを企画したり、という現在の流れに至る。

目下の大きな課題は、農園への集客だという。農協を辞めたばかりの頃は、百貨店やスーパーをターゲットにしていた。でも、今の時代は、直接販売できるお客さんをどれだけ持っているかが大事ではないか。単価も高いし、売り手のやりがいのにも繋がる。だから、たとえばマルシェや外部イベントへの出店の際も、物販だけでなくワークショップをやることが、集客に繋がると感じているようだ。商品そのものはネットでも買える。ひとに会いに来るとか、雰囲気味わいたいという想いが、直接販売に繋がるのではないか。

初代の動機そのものは、竜太さんの読み通り、時代とともに薄れていってしまうかもしれない。国のためになにかしなくては、と考える人間は、きっと今の時代はあんまりいない。そのひとが、そのひとらしく生きていく方法を、模索している世の中だ。竜太さんが大切にされているのは、お祖父さんの気持ちを伝え続けることである。お祖父さんの意思を残したいと思うから、会社をつくり、雇用を産み、ひとと繋がり、そうして農園

を維持せんとするのだろう。興味深いのは、そういう、とても人間らしい理由を竜太さん自身のやりがいにしながら、それを支える彼の堅実な生活感覚である。夢見心地ではなく、自分や自分のコミュニティに属するひとたちが、いかにやりがいを持ちながら稼げるか、というまなざしを持っている。

トークの終わりには、参加していたレッツスタッフたちから「出張料理教室をしてほしい」「みかんの搾汁してるところを見てみたい」「たけし文化センターの玄関で果物を売って欲しい」など、いち生活者としての具体的なアイデア（というか切実な要望）が次々と挙がった。安くて安心して美味しい作物を食べたいというわたしたち消費者の願いは、つまり心豊かに生きたいという点において、立場は違えど、やりがいを持ちながら働きたいという生産者と変わらないのだった。我々は豊かに生きるために、お互いに繋がりたいと考えているし、その必要がある。今の時代こそ、竜太さんのような掛け橋が不可欠なのだと感じた。

塚本千花

.....

高橋雄太さん(教員)

2023年9月15日(金)

小学校の先生とこんなにゆっくり話したことがあったらどうか。小学校に通っていたけれど、先生との断片的な記憶はあっても、なんで先生になったのか、どんな仕事をしているのか、実際にお話を聞く機会は今回が初めてでした。超多忙と叫ばれる教育現場を飛び出して「こども食堂」の活動をしている先生がいると聞きゲストにお招きしました。

高橋雄太さんは現在、浜松市内の小学校で教員をしていらっしゃいます。ラグビーで鍛えられた大きな胸とはじける笑顔。「学校では子どもが僕の腕にぶらさがったりしてますよ～」と笑って話してくれました。

高橋先生が福祉に関心を持ったきっかけは、ダウン症の妹さんの存在があったからだといいます。支援学級や福祉が身近にあったことから障害児教育に関心を持ち、大学では特別支援教育を専門に学んでいたそうです。教員として、特別支援級の生徒たちと関わることも多いといいます。そして教員になってまもない頃、担任をしていた生徒が生活困窮家庭だったことからこども食堂と出会ったそうです。ただ、難しさを抱えた生徒への支援は容易ではありません。チームで動く教育現場では、一人の教員

が動くわけにもいかずもどかしさも感じたときを振り返ります。この生徒との出会いをきっかけに、地域の子ども食堂に参加するようになったそうです。子ども食堂では学校では話にくいことがゆっくり話せたり、食を通じて人間関係や社会との接点をつくることができます。「食の力ってすごいかも!？」と体感した高橋先生は、当時の勤務校である佐鳴台校区に子ども食堂がないことを知り、子ども食堂「さなるだいにんぐ」を立ち上げました。

佐鳴台エリアは団地に住む外国籍住民も多く、転入者もよくみられる人の出入りが多いところ。またエリアによって貧富の差も見られ、日本の縮図と語られることもあります。高橋先生は、協働センターや地域のボランティアの方々と協力しながら子ども食堂を運営するなかで、本当に必要なおところに届いている実感を持ってたといいます。困った時にそこにいけばどうかなという場所をつくり、そこで生まれた出会いからつながりが生まれていきます。いろいろな人がごちゃまぜになれる子ども食堂「さなるだいにんぐ」を運営しながら、地域づくりへと発展させています。子ども食堂は食事を提供するだけでなく、居場所や社会の接点としての機能もあり、学校と関わりが途切れてしまいそうな子どもにとっては大きなライフラインとなります。家庭、学校、子ども食堂などの地域の活動がつながって一緒に子どもを見守っていただけるとも理想的だと思ふ反面、どこで出会えばいいのか忙しい先生とどうつながればいいのか連携の難しさを強く感じています。先生の忙しさを耳にするたび、学校教育や教育現場のあり方を考え直す必要があるように思います。これからの高橋先生の活動を心から応援するとともに、いつか一緒にできたらいいなと思いました。

杉田可縫

.....

長坂聖子さん

(スクールソーシャルワーカー、一般社団法人みらいTALK)

2023年9月22日(金)

ゲストの長坂聖子さんとは、一般社団法人みらいTALKが開催している学習支援「juiceクラス」で出会いました。juiceクラスでは小学生・中学生に勉強を教えたり、一緒にゲームやおしゃべりをしたりと、学習を切り口に困りごとを抱えた子どもたちの居場所を作っています。ボランティ

アには地域の大人から、大学生、長坂さんのような福祉や医療などの専門家もいます。いつも笑顔で大人にも子どもにも同じように丁寧に接している長坂さんは、ずっと気になる存在でした。今回は耳にしたことがあるけどよく知らない「スクールソーシャルワーカー(以下SSW)」のあれこれを教えていただきました。

教育のなかに入り込む福祉のプロ、SSWとはどのような人たちなのでしょう。2008年に文部科学省のSSW活用事業が調査研究事業として開始されました。事業の趣旨は、「いじめ、不登校、暴力行為、児童虐待などの生徒指導上の課題に、教育分野の知識に加え社会福祉等の専門的な知識・技術を用いて児童生徒の置かれた様々な環境に働きかけて支援を行うSSWを教育委員会・学校等に配置し、相談支援体制を整備する」というものです。SSWは担当の学校を数校掛け持ちし、日々支援を行っています。学校に向かうのはもちろん、家庭訪問や医療機関への同行支援もするそうです。学校の先生や専門機関から相談を受けるなど、困りごとを抱える子どもを見つけたら、学校と相談・連携しながら支援を進めていきます。どういう子なのか、どういう家庭なのか、今までどうだったのか、なぜそうなったのかを見立て、話し合いながら手立てを考えていきます。ときには医療機関や地域団体なども加わり、チームとなって子どもの困りごとと向き合います。子どもと直接関わることはもちろんですが、連携のための連絡・調整や会議への出席など間接的支援も業務のひとつです。SSWが単独で動くことはなく、いかに周りに動いてもらうか「環境に働きかける」ことで支援を進めていきます。

お話を聞くなかで強く感じたのは、SSWを取り巻く環境が整備されていないもったいなさです。まだまだSSWは認知度が低く、学校の先生に向けてSSWについて知ってもらうための研修も自ら行うそうです。また、専門職かつ重要な立場であるにもかかわらず、基本的にSSWは非常勤であるということにもとても驚きました。支援する側の環境を整えていかなければ、継続的な子どもへの支援も難しくなってしまうのではないのでしょうか。

SSWの仕事は完全なゴールがないように思います。大人になってからも支援が必要な場合、学校ではないどこかへ支援のバトンタッチをする必要もあります。一緒に動いてもらえるよう周りをエンパワメントしたり、学校に行けない子どもといっしょに「校門にタッチしにいこうよ」と学校との関係が切れないようにするなど、コツコツ少しずつ積み重ねていく支援の日々。常に悩みながら活動していると長坂さんは言います。

レッツが運営しているちまた公民館にも、近所の学校のSSWさんがた

まに来てくれます。学校になかなか来ないという子どもと一緒に来てくれたこともあります。「今日も誘って見たんだけど、家から出て来なくてね。」ということがほとんどです。どうやったら来てくれるかな〜と一緒に考えたり、最近こんな子どもたちが遊びに来ますよ〜と話したり、ときには宿題をしに公民館に来た小学生たちとおしゃべりすることもあります。私は子どもの家まで行って「一緒にでかけようよ」と誘うことはできないけど、公民館を開き続けること、地域の居場所としてできることを、長坂さんやSSWのみなさんと一緒に考えていきたいです。

杉田可縫

.....

山本雄一郎さん (Green Cog)

2023年9月29日(金)

今回、浜松市南区卸本町でGreen Cogという自転車店を営んでいる店主の山本雄一郎さんに、ちまちまトークをお願いした。8年という長い付き合いになるが、場所を設けて隣り合わせで喋るのは初の試みであった。

支援の話になってしまうがULTRAの支援、特に壮さんとお出かけスポットの一つとしてよく顔を出しに行っている。壮さんはだいぶ気に入っているようで、今まで長年通っているかのように作業場やバックヤードに入っていく。ヘルパーとしてはズカズカと入っていくのは気が引けるため、壮さんを止めるが、工具や壮さん自身が気になるものがありキラキラしている目を見たら止められる訳もない。しかし、店主の山本さんやお客さんが「今日は入れないなあ」「待ってて」というとスッと止まり待っている。お客さんたちも特に気にせず「今日石ないじゃん」「あそこにあるよ」など障害者の壮さんでは無く久保田壮一個人として関わっている。ヘルパーの私が山本さんなどをお願いしたわけではないしそんな空気を作った訳でもなく自然とそうになっていった。

自転車というツールを使って関わった人たちから人生相談をされたり、山本さん自身も相談にのってもらったりしながらそれぞれの経験値を共有しながら暮らしていける事は面白いとおっしゃっていた。壮さんが山本さんやお客さんの話を聞き皆さんが自然と関われる強さはそのGreen Cogというコミュニティスペースで自転車というツールを使い広がっていった山本さんの人柄が作っていったのだなと感じた。

お客さんの自転車相談で「こういうパーツがあるんです!どうですか?!」

という提案は自分がやりたいことをお客さんのお金でやっていると言いながら言っていた。私自身もヘルパーという仕事も一緒だとその時に思った。彼らの手となり足となり食事を作ったりお風呂介助をしたりしているが外出支援になると「俺がここに行きたいから行くぞ!」と、海や山などに赴いている。壮さん本人は、まあ楽しそうな雰囲気はない。でも、続けることで気になってくれるのであろうと思って続けている。

山本さんは「偉そうに言えば福祉ってどうなの?とかカッコつけて言わなくても楽しければ良いじゃん!自転車も同じで楽しければいい。それで良いじゃん」と言っていた。そんなシンプルな落とし所を作るコミュニティが増えていけば良いし自転車と支援は繋がるものがあると今回のトークで改めて思った。

櫻井喜維智

.....

大村智子さん (KIZUKI の食堂)

2023年10月20日(金)

パーマカルチャーとの出会い

大村さんは、生まれも育ちも浜松市、お母さんと娘さんと猫3匹で今は暮らしていて、浜松駅から歩いて15分のところにある「みかわや|コトバコ(以下、コトバコ)」の中で「KIZUKIの食堂」を営んでいます。最初に「人からよく料理人や飲食業と言われるが、いつも違和感を感じている」と言います。名刺の肩書きにも悩むそうですが、大村さんは「食からコミュニティと街をつくる」をキーワードに活動をしています。

そもそもコミュニティに強く興味を持ち始めたのは「パーマカルチャー」からでした。パーマカルチャーとは、「パーマナント(永続性)と農業(アグリカルチャー)、そして文化(カルチャー)を組み合わせた言葉で、持続可能な農業をもとに持続可能な文化、即ち、人と自然が共に豊かになるような関係を築いていくためのデザイン手法(パーマカルチャー・センター・ジャパンさんのサイトより抜粋)」のことで、20代にパーマナントカルチャーを通して循環型の暮らしを1年間学びました。そして、2011年、パーマカルチャーの原理・原則に基づいて、市民が自らの創造力を発揮しながらまちづくりを行う「トランジションタウン」の取り組みに賛同し、自分で持続的なコミュニティを実践したいと考えていたため「トランジションタウン浜松」を立ち上げます。

「KIZUKIの食堂」と「jimicen（ジミセン）」

しだいに「人が集まれる場所」が欲しくなり探していたところ、コミュニティカフェ「C-cafe」と偶然出会い、誘われて事業運営に参加することに。また、カフェが料理好きな人たちが日替わりでランチを作って提供する「ワンディシェフ」形式だったこともあり、そこに大村さんも加わったことからKIZUKIの食堂が生まれました。

その後、トラジシオンタウン浜松とC-cafeから離れ、コミュニティビジネスを実践したいと考えていたところ、家賃の安い雑居ビルの1階店舗スペースを見つけ、コミュニティ・カフェ「jimicen（ジミセン）」をオープンします。県外や海外からもお客さんが来てくれたというジミセンは、多業種・多分野の様々な人が集まり「お客さん同士が初めて出会って、そこから仕事とか畑とかなにか一緒にやろうということが生まれていた」そうです。そうした「場に対して食を提供すること」が大村さんの活動でした。ジミセンの日常の中で、大村さんは食の立場から「いろんな人が集まって、人と人が出会って、仕事やったり、ジミセンでイベントやったり、なにかやって、なにか起こる」という様子をいつも見ていました。

ご飯を通して生まれる会話

その後、雑居ビルの取り壊しが決まりジミセンは閉店します。ジミセンの活動から「食があるとなんかおもしろくなる」と強く感じていた大村さんは、相談をした飲み友達から、現在、食堂を運営している「みかわや|コトバコ」を紹介されます。

コトバコは、元タバコや洋服、文房具などを販売する雑貨屋で、閉店後も荷物が残っていて大がかりな片付けをしないと使えない状態でした。さらに、コロナ禍と重なったため大勢の人を集めることができず4、5人で1年かけて片付けをしました。その作業の際、大村さんは「意図的に必ずご飯をつくっていった」そうです。作業の手を止めてご飯を食べると、アイデアを出したり、互いにどんなことをやりたいのかといったことを話す時間が生まれました。目的的な自己紹介ではなく、ご飯を通して生まれた会話から1年をかけてお互いのことをコツコツと知っていった。この時間が今のコトバコの安定感につながっているそうです。

食があると豊かな場が生まれやすい

ここまで、大村さんの遍歴と現在の活動についてお話いただきました。食を通してコミュニティを見続けたりつくったりした経験から「食があると豊かな場が生まれやすい」と言います。

まず、食があると人が溜まるようになり、ときにつながったりする。会話が生まれることから、お互いを知ったり共有する機会がつけられる。そして、たまたま居合わせた人同士でビジネスやプロジェクトが生まれたり、同じ気持ちの人同士（例えばお母さん同士とか）で悩みの共有や情報交換などができる。また、日々の食事量や様子から健康状態が推察できたり、食事の後はやりたいことが思い切りできる。ちなみに、食事が出せなければ、お茶でも十分なんです。」

おいしい食事を作ることはもちろん、楽しく食事ができる環境、食から生まれる活動やコミュニケーション、食からつながる健康など、食事が支えるというよりは、食事と人と社会（コミュニティ）の循環を意識している大村さんならではの視点だと感じました。

近い未来の私の食堂

最後に、そんなに遠くない未来のお話が3つありました。

最初に、「味噌工房」。地域のあまり使われていない公会堂とかをつかって味噌工房をやりたいそうです。販売をしながら、備蓄をすることで万が一の災害時に防災食となり、栄養価のある味噌・梅干し・ご飯があれば健康的に災害を乗り越えられると大村さんは話します。

次に、「スナック」。スナックは人が集まるのにいい場所。大村さんは夜になるとすぐに眠くなるから先に寝て、常連のお客さんが洗い物やレジ締めをして営業終了という構想。

最後に、「雀荘」です。大村さんは麻雀好きだそうで、昼は、おいしいランチを出しながら主に地域の高齢者の方々に麻雀をやってもらい、夜は、おいしい夕飯とおつまみやお酒もありで、社会人向けに雀荘をやりたいというのが夢だそう。

おわりに

初めに大村さんからあがった「食からコミュニティと街をつくる」というキーワード。パーマカルチャーの勉強から始まり現在のKIZUKIの食堂までの道のりをふりかえると、改めて料理の話ではなく「食はメディア」と捉えて日常や生活に根付いたコミュニティづくりを実験し続ける大村さんの姿が浮かびました。

私たちは、日々食事をつくって食べています。なんなら食事がなければお茶でもいい。「食」という手法は、身の回りがある場やコミュニティにそっと挿入することで気軽に隙間をつくることができます。そして、「食」

と同じように、もしかしたら今やっている趣味や活動も、切り口を変えると人とのつながりやコミュニティづくりへとつながっていく可能性があります。その一歩として、まずはお互いのことを知るために、知りなおすためににおにぎりをこしらえて語らう時間をつくりたいと思います。

水越雅人

.....

大端将さん(みかわや|コトバコ)

2023年10月27日(金)

たけし文化センターのある連尺町から徒歩10分程度にある尾張町の交差点の角に「みかわや|コトバコ」の建物は佇んでいます。「みかわや|コトバコ」は元々尾張町の雑貨店「三河屋」であった空き家をリノベーションして作られた家、そして複合施設であり、現在は製本屋さんや発酵食が自慢のKIZUKIの食堂、街角コーヒー屋、出張お菓子屋さんなどが入居しています。

大端さんは「みかわや|コトバコ」の家守(やもり)であり、発起人でもあります。浜松市が主催するリノベーションスクールを通してこの空き家店舗を知った大端さんは壁を作らない広い間取りにして様々な交流と出来事が起きる場を作りたいと思ったそうです。

そんな「みかわや|コトバコ」を拠点にする大端さんが考えているのはエリアリノベーションです。交差点を巡るように小さなお祭りを開いたり、近くの大学の学生がレモンサワーを出店したり、地元の農作物市を開いたりなど、地域に住む人たちが訪れるような催しを実施しています。エリアリノベーションを進めていくには地域の人たちとの協働が必要であり、これから尾張町を中心に空き家をリノベーションして味噌づくり工房や陶芸工房などを地域の人と作り上げていきたいと語ります。

そのような活動をする大端さんは、なぜエリアリノベーションを志しているのでしょうか？

元々住宅雑誌を作る会社に勤めていた経験から、日本における住宅とその業界の問題点を鋭く指摘します。家とはできるだけ長く持つように作るべきものですが、日本の住宅の多くは20年程度でダメになってしまうと言います。なぜなら未だに変わらない戦後すぐの建築法を利用した住宅会社による利益至上主義というものが「いい家」を作ることの邪魔をしていて、一生に一度の買い物である消費者の目線というものが存在しない

事業になってしまっていると言います。そうした短いスパンで切り捨てられる家たちは空き家になり、地域から人がいなくなることの一因でもあります。

その空き家たちをリノベーションし、何かをするために場所を求めている人たちに貸出すことでその建物から人との交流が生まれるといいと大端さんは語ります。大端さんは自分自身には「街づくり」という意識はあまりなく、面白いことをやっている人を受け止めてくれるようなハードとなる家、箱を作りたいのだと言います。

一方でこうした活動を続けていくにはベースとなる事業が必要であり、大端さんは株式会社thinxを立ち上げて100年持つ家を作ろうとする地域工務店の事業を支援したり、家づくり相談や行政と連携しながら住宅に関する消費者教育を行いながら収益を得て、それを空き家のリノベーションに還元していく形で事業を回しているそうです。たけし文化センター/アルス・ノヴァと同じように事業の継続や拡大にはどこかで収益を得る必要があります。大端さんの場合はそれがそのままエリアリノベーションへ繋がるような事業であることが分かります。

参加者からは「私も気づかずに安い方の家を買ってしまうだろう」と住宅業界の深い話について驚きの声や「自分の家もそうだなあ」との声がありました。家というものは人にとって生活の中の時間の多くを過ごす場所であると同時にその形は人それぞれです。それでもこの社会の中で家を買ったり、家の主になる、その家に住むことには現在のあり方よりもっと良い選択肢を多くの人が享受できるようになるために、大端さんの活動は重要なことだと思います。また大端さんによると浜松には良質な工務店が全国と比較してもとても多いとのこと、それが浜松で活動する理由の一つでもあると語りました。

見山陸生

.....

榎本雅之さん(シネマイーラ)

2023年11月10日(金)

若い頃、映画館巡りを日課にしていたわたしは、浜松に越してきたときに、街に映画館がたくさんあるのを知って喜んだものだった。しかし、わずか数年のうちにそれらの映画館は軒並み閉館してしまう。2008年から東映会館の跡を引き継いだシネマイーラは、浜松の映画館文化の最後の

皆という印象がある。

わたしは歳をとるに連れて日々の雑事に追われるようになり、映画館になかなか行けなくなってしまった。シネマイーラにも、この数年で数えるほどしか行っていない。そんなわたしが「シネマイーラがなくなったら困る!」と口にしても、無責任で勝手な意見と受け取られてしまうかもしれない。しかし、それはわたしの心の底からの本心なのだ。

2010年頃、わたしはとある広告会社で働いていた。そこは絵に描いたようなブラック企業だった。一日十六時間の労働、日々社内に飛び交う怒号、休日出勤当たり前、経営状態は必ずしも良くはなく、売り上げを作るために毎日必死にならなくてはいけなかった。浜松街中がわたしの営業担当エリアだった。そのころすでに浜松中心街は商店街の機能を失って歓楽街になっており、わたしの担当しているお客さんの多くはいわゆる飲み屋や夜のお店だった。そのうちの一つに、シネマイーラと同じビルに入っている宴会専門居酒屋があり、わたしは毎月打合せのためにそこを訪れるのがルーティンになっていた。わたしはそのビルに打合せに行くのが好きだった。お客さんの店は四階、シネマイーラは三階。エレベーターに乗ってボタンを押すときに、いつも「ああ、シネマイーラがあるな」と思う。それだけで、わたしの心の芯の部分が暖くなるのだ。ビルに入るときと出るときに、「今は何の映画を上映しているのだろう」とポスターを見る。それだけで、わたしの心は踊り、浜松も捨てたものではないと思えるのだ。

もちろん、映画館はそれを外から眺める人のためにあるわけではない。チケットを買って中に入る人がいなければ続けられないし、「観客」とはそういった人のことだけを言うのだ。

——館長の榎本さんとは、以前にも何度かお話をしたことがあった。榎本さんはそのたびに経営の難しさを口にしていた。コロナ禍のときには、Twitterで経営の危機を訴える榎本さんの投稿を目にした(当時離れた土地でカフェの店長をしていたわたしはそれをリツイートすることぐらしかできなかった)。

トーク当日も、榎本さんは映画館経営の経済的な困難について、例を挙げながら丁寧に説明してくれた。コロナ禍の影響は今も残っているという。わたしは、シネマイーラの存在の有難さを享受しておきながら、経営に貢献できていないわが身の現状に心苦しさを感じながらそれを聞いた。消費者は「あるのが当たり前」と思うものだが、現実はそのではないという事は、まさにコロナ禍の影響で前職のカフェを失った経験からよく分かっているつもりだ。街の中は「あるのが当たり前」と思われている施設

で埋め尽くされているが、それを支えている下部構造はもちろんお金だ。その下部構造が忘れられてしまえば、「当たり前」は崩れ、街にはシャッターが下りたままの物件が増えていく。榎本さんのお話は、そういった「当たり前」を改めて思い出させてくれた。

「映画館に行く」という体験は、何度味わっても特別なものだ。しかし、その体験は一律なものではない。とかく興行収入の額で語られることの多い映画の世界だが、示唆に富んだ豊かなテーマを持った作品が必ずしもヒットするわけではないし、ヒットした作品が必ずしも手放しで賞賛されるべきものであるわけでもない。下部構造はお金だが、その上部はそれを支えているものの守備範囲を大きく逸脱していく。すなわち、経済原則を基礎に置いた「自然淘汰」は、「うまくいかないようにできている」のだ。「うまくいかないもの」は、経済原則が突きつける「淘汰」に抵抗しなければならない。抵抗をやめればその命脈は尽きる。街がその二重の傾向——経済原則に従属しようとする傾向と、それに抵抗しようとする傾向——によってできているのだということを、わたしたちは忘れてはならないだろう。しかし、その事実は、わたしたちに何かキラキラしたものを、生命の光のようなものを見せてくれるようにわたしには思えるのだが、それは気のせいだろうか。

曾布川祐

市原健太さん(水曜文庫)

2023年11月17日(金)

数年前のこと。わたしは雨の降る中、水曜文庫を訪れた。古い建築の一階にある店内は、老朽化から雨漏りをしていた。店主の市原さんに、「本が濡れたら大変ですね」と言うと、市原さんは「別に直さなくて良いんだよ、このままで」と言う。「しかし、商品が台無しになっちゃうじゃないですか」とわたしが言うと、市原さんは「良いんだよ、天井が落ちてくるの待ってるんだから」と無然とした表情で言った。

「天井が落ちてくるのを待っているんですか」

「そうだよ、そうしたら終わりにできるじゃん」

市原さんの言う「終わり」が何の終わりのことを言っているのかわからなかったが、わたしはあえてそれ以上は聞かなかった。結局、天井は落ちてくることなく、「終わり」は訪れないままで、今日も市原さんはその時

と同じ場所に座って店番をしている。雨漏りはいつの間にか直っていた。

「市原さんってどんな人なんですか？」と人から聞かれると、わたしはいつもこの話をする。雨漏りのする古本屋の店内で天井が落ちてくるのを待っている市原さんの姿が、愛おしく、ユーモラスで、象徴的だと思うからだ。

そんな市原さんをたけし文化センターに呼ぶことになった。わたしが市原さんに出会ってもう10年になるが、じっくりと時間をかけて話を聞く機会というのはこれまであまりなかった。市原さんが何を思って前職の書店員を辞め、水曜文庫を始めることになったのか。市原さんがいつも座っているレジカウンターの後ろに並ぶ大量の非売品のアナキズムの本は、どういったわけでそこに並べられているのか。たびたび危機を叫ばれている紙媒体の版元としての出版業界の現在をどんな風に考えているのか。聞いてみたいことはたくさんある。

トーク開始30分前に会場に現れた市原さんはお店で見るいつもの姿だった。

「特別なことは何も話せないが、たまには知らないおじさんの話を2時間ぐらい聞いてみるのもいいものかもしれませんね…」

そう話す市原さんの語り口に、確信的なところは何もない。話は言い淀みと沈黙、仮定と訂正によって進んでいく。それは、市原さんの生き方そのものを現しているようだ。

市原さんは、「〇〇さんは頭が良い」「〇〇さんは能力が高い」と同業者を引き合いに出しながら、「僕は若いころから何もできなかった」と語る。しかし、「頭が良い」や「能力が高い」というのは、既存の価値観や常識に対して無自覚・無批判に応えた結果として得られる評価なのではないだろうか。その意味で、言い淀みと沈黙は、「考える」ということを本気で実践している人の語り口の特徴なのではないか。

「古本屋をやろうと思って前職を辞めたわけではない。仕事を辞めて、しばらくは元の職場でバイトしていたが、家に本がたくさんあったので古本屋をやったら良いんじゃないかと思っただけです」

「水曜文庫」という名前は、もともと文庫を営んでいたお母さんのそれから引き継いだものだという。自身でも趣味でたくさん本を集めていた。カウンターの後ろのアナキズムの本は、市原さんが若いころに買ったものらしい。

「かっこつけて買って並べていただけです…」

大手書店を辞めて個人経営の書店をやる、そういった流れは地方でも数年前からブームになっている。今や県内を代表する個人経営の書店と

なった掛川市の高久書店と静岡市のHIBARI BOOKSの経営者は、いずれも市原さんの元同僚だ。間もなく開店から11年を迎える水曜文庫は、その先駆的な存在だった。少なからず、市原さんの存在が、彼らの独立する際の背中を押したに違いない。しかし、市原さんの「独立」には、強い意志や決心があったわけではなかった。

「とりあえず食っていかなきゃいけないですから」

”風に吹かれて”、そんな言葉がぴったりとあてはまる市原さんの生き方は、まるでつげ義春か蛭子能収の漫画のようだ。誰の真似をするでもなく、器用に立ち振る舞うわけでもない、しかし、新しい物事は、そんな態度から生まれてくるものなのかもしれない。

曾布川祐

大隅和子さん（浜松の未来を育てる会／寿月すみたや）

2023年11月24日（金）

お話をうかがった大隅和子さんは、自身の子育て経験を経て児童画心理、カウンセリング、自己分析、教育分析などを学び、浜松市で早くから子育て支援に着目し活動をしています。2008年に「ここみ広場（浜松の未来を育てる会）」を立ち上げました。今現在も、子育て支援の活動を続けていらっしゃいます。優しい雰囲気、穏やかな口調からは想像できない苦悩の20代と子育て期が今の活動につながっているそうです。

今回のトークで一番はとしたことは、「親だって最初は子育ての“初心者”。わからないことだっていっぱいあるし、難しいことだってたくさんある」ということです。言われてみれば当たり前のことですが、「親」と聞いた瞬間に「子育てをちゃんとできるひと」のように思っていました。常日頃、「世の中のママとパパってすごい！」と思うのです。生活の中心に子どもがいて、産むまでだって大変だし、赤ちゃんの時期は目が離せない、保育園への送り迎え、大きくなったら人間関係や将来のことなど悩みはつきないし、ある程度の支援はあるもののお金だって必要です。人間を育てるってすごい労力なのに、多くの人が当たり前のように子育てをしていることがとても不思議で仕方ありません。このまえ母に「子育て大変だった？」と聞いたら、「ちっちゃいときは泣いて泣いてすごかったよ！正直、口にパンつつこんだこともあるよ。虐待だったかもね。」と言っていました。（でも愛情もたっぷり注いでもらったので大丈夫!）しかし

実際に子育てをするなかで一人悩み苦しみ、鬱状態になることや虐待が起きるなど悲しいニュースも耳にします。また、子どもへの支援が叫ばれるなかで、親への支援は話題にあがることはまだまだ少ないように感じます。全員が子育てを経験するわけではありませんが、親をしているひとや子どもと関わること出会うことはあります。同じ地域に住むひとりの人間としてできることは何があるでしょうか。

子育て支援とは子どもへの支援ではなく、子育てをしている“親への支援”です。親が不安定であれば、子どもの生活も不安定になります。その逆もしかりです。子育て支援により親を支援するということは、結果として子どもへの支援にもつながります。具体的な子育て支援の内容とは、子育てに関する情報提供をしたり、相談ができたり、孤立しないように社会との接点を作ったりと様々です。また浜松のように外国籍住民が多い地域では、外国人向けのサポートを行っているところもあります。保健所や児童家庭支援センターなど行政が行っているものもありますが、そこに来ない家庭は支援が途切れてしまうこともあるそうです。また保育園や学校は親への支援やアプローチは難しく、子育て広場など親への支援の場が地域に必要なだと大隅さんはいいます。

大隅さんが師と仰ぐ先生から受け取った言葉たちも今回のトークの中でたくさん紹介してくれました。「世界に1人だけ自分のことわかってくれるひとがいればいい」「子育てって大変！わかるよ！でもね、1日に5分だけ、ぎゅっとしようよ」この言葉を聞けただけでも、このあとの人生とても楽チンに生きられる気がします。きっと大隅さんは誰にでも同じように声をかけてくれると思います。お互い言葉をかけ合って、励ましあえる地域には大隅さんのような人がいなければいけないと感じます。「人っていいよね、人間ってすてたもんじゃないよねっていう経験、そのあとに助けてって言えるような人間にする。」と大隅さんはいいます。そんな子育て支援、浜松でもっともっと広がっていきますように。

杉田可縫

.....

坂本清子さん（タイムトンネル）

2023年12月1日（金）

五社神社周辺、今は随分と閑散としてしまっているが、ダンスホールや選挙事務所、ブティック等が並ぶ五社神社の表参道だった。賑わいが

戻ってくると良い。タイムトンネルだけでなく向かいの大木屋も営んでいる。大木屋は学生や若い人等に半日3000円程でスペース貸しをして、自由に自分の出したい食事を出すスタイルをやっている。はじめは自分達で白いたい焼きを出したこともあったが採算が取れなかった。その為、誰かに貸してみたところ面白い展開が生まれた。タイ焼きそばのパッタイ屋さん、カレー屋さんなど。タイムトンネルに飲みに来た若者が大木屋で出店ということもよくあった。ここでの出店から他のイベントでの出店に誘われて店だけでない場所で出店することもあり楽しんでいるようだ。今はSNSもあって出店の際は色々な人が来る。広がりを感じる。

年末には五社神社に参拝する人が通るので店の営業だけでなく外でホットワインを売ったり、カウントダウンをお客さんと楽しんだりしている。他に講演会やミニLIVE、カラオケ大会等やっているが、自分（清子さん）が疲れたら近所の自宅に帰って寝ちゃう。後はバイトの女の子達やお客さんに店を任せてしまう。そうやって適当に営業しているのが店の長続きの理由だと思っている。

店は今年創業43年になる。1981年に始めた。大学で上京して赤坂のサイフォン式のコーヒー屋でバイトをしていた経験から店をやりたいと思って地元に戻った20代前半で今の店を始めている。当時は市街地全体に活気があった。松菱、西武、丸井、デパートに沢山の人が出掛け五社神社周辺やゆりの木通りにも賑わいがあった。

元々街生まれの街中育ちで人生の大半はこの周辺で生きてきた。実家は母が倒れ売りに出したが、店の近所に自分の住まいがあり、妹や姪の家族も近所に住んでいる。店でバイトしている娘も近所に住んでいて、親しい人が近くに沢山いてほとんどの事をまかなえている。

店には老若男女問わず色々な客が来る。遠くは袋井や春野町から来る常連さんもいる。店を手伝ってくれることもあるし、夜遅くには店を任せちゃうこともある。遠くから来た人の中にはそのまま眠って朝に帰る人だっている。ここには寂しい人達が集ってきているのかな、と思う。みんな話をしに来て楽しんでいく。店だけでなく近くの五社公園で花見したりポウリング行ったり、バーベキューしたり、こないだはバスをチャーターして50人程で2回目の靖国神社参拝ツアーをしたりした。

朝まで店を任せて失敗したり怖い思いをしたことは一度もない。ちゃんと教育している（笑）。駄目なことは駄目、とちゃんと言う事が大事だと思っているし、変なお客に対しても毅然とした態度でいることが必要。お陰様で理不尽なことや怖い思いをせず、自分だけでなくお客さんも居心地の良い場を作ることができている。

タイムトンネルの場所は未だに賃貸なのだが、昔の大家さんから買い取らないか?と言われた時に迷っていたら常連さんに IT 社長さんが居て、彼が代わりにここを購入して、自分が家賃を払うということをしていて面白い。大木屋も賃貸で 15 年程借りている。賃貸の方が気楽で良い。いつでも辞めれるかなと思っていたが色々な人が出入りして若者に使ってもらったり、リノベーションスクールの人なんかも出入りして内装工事をしたりして今でも続いている。場所があると人が来る。

カウントダウンのイベントで学生にも手伝いさせてワーワーと忙しくたい焼き作ったことを楽しんでくれる。この体験が色々なことに活かされていて、看護師になった子は仕事に忙しさの中で優先順位を決める際の良い練習になったと言っていた。商売は大変。お客さんの入りが一気にやって来る時もあれば全然来ない時もある。でも楽しい。食べることが好きで他には興味があまり無い。料理を作ることが好きで、店を出すものは全て手作り。漬物やドレッシング、梅酒もなにもかも。仕込みは忙しいが好きでやっている。田舎のおふくろの味かな。お客さんからいただいたものを調理して出すことも多いし、いただいた沢山のミカンを外で販売したりもする。自分の食事だって店の中で済ませてしまうし、ゆるくてゆるいお店。だから長く続いている。料理以外は気楽にゆるくやっていて、生活の中にお店がある、と思えている。だからお客さんと店、という関係でなく壁の無い関係を作っていて、教育もあってトラブルなく長年行えている。駄目なものは駄目ということもあって説教も多いから M が集う店とも言えちゃうね。自分が説教してバイトの娘が慰めて、という状態も面白く思っている。他には、店で生まれた客同士の関係性なんか面白く、常連さんのお子さんの面倒を見てあげたり家に泊めてあげたり、人と人が循環しているようにも感じる。店を辞めるに辞めれないと思っている。人との縁を大事にしている、昔の日本というかアジアっぽいというか面白い場を作れていると感じている。

佐藤啓太

.....

村田亜希子さん

2023 年 12 月 8 日 (金)

村田さんとお話ししてみたいと思ったのは、個人的な動機だ。私自身 30 代になり、周りの友人や同僚たちが「子育て世代」に突入し、色々大

変だという話を聞く機会が増えたからだ。友人・同僚たちから聞く話は正直しんどいものが多い。「昼間はワンオペで誰とも会えない」「2 人目を産みたいけどキャリアが途切れそう」「夫と 2 人だけじゃ育児と家事が回らない」。今の日本社会を反映したかのような彼・彼女らの言葉たちは、私の胸に重くのしかかる。そして、「今の社会で子どもを産みたいって安心して思える環境ってあるの?」と疑問に思った。

そこで、出会ったのが村田亜希子さんだ。この浜松のまちで、仕事と子育てを両立しながら生活者として地に足をつけ生きている。小学校の先生や IT ベンチャー企業で子育て期の女性の社会参画を支える事業に携わり、現在は世界の食の不均衡の解決を目指す NPO 法人 TABLE FOR TWO international に在職している。さらに、村田さんご自身も 2 人の子どもを育てながら、「浜松市の学童保育を考える会」の代表をつとめるなど様々な活動をされていた。また村田さんの長女さんは不登校を経て、学校とオルタナティブスクールを並行して現在通っている。

村田さんは現在、フルリモートで東京の NPO に勤めている。以前は浜松の IT ベンチャー企業で働いていたが、40 代を目前に自身はずっとやりたかった仕事に挑戦したいという思いが強くなり、さらにコロナ禍をきっかけにリモートワークという働き方が急速に普及したことも受け、今の会社に変えたという。また、まちなかのコワーキングスペースで事務所を借り、電車沿いの学校に通学している子どもたちとまちなかで合流できるようにしてあるらしい。

しかし、浜松のまちなかにはサポートスクールやフリースクールがほとんどない。結局、そういう施設は親が送り迎えしなければいけない郊外に多いため、送迎のために仕事を辞める母親がいる場合もあるらしい。一方で、オンライン上のメタバースの世界で学習環境やコミュニティが急速に作られている。現実と仮想空間、両方からのサポートができるように進んでほしいね、会場からそんな声があがった。

また学童においても、保育園は増えたものの、学童保育の数は変わっていないらしい。幼少期は子育てサロンなど様々なコミュニティがあるが、小学校にあがった後の子どもたちの居場所は足りていないのが現状だ。村田さんは、もっと男女問わず、産業など業界問わず、様々な立場にいる大人たちが関心を持って、子どもの居場所やユースセンター的な場所を浜松のまちなかにつくることを考えてもらいたいとおっしゃっていた。

また、会場からも「不登校」とか「子ども」とか限定的な居場所ではなく、様々な人が出会い、いろんな価値観に出会えるコミュニティが必要だ、という声も出た。なるほど、そう考えると今レッツが運営している

「ちまた公民館」はその機能を果たせるかもしれない、そう感じた。

最後に、村田さんが、仕事と子育てを両立しながら様々な壁を乗り越え楽しくやってこられたのは、多くの浜松の市民活動の団体に出会ったからだという。子育て支援、女性起業家コミュニティ、NPO ネットワークセンターなど、SOS を出すと、誰かが拾ってくれた。そういうどこかに繋がる機会を、もっと多くの子育て世代に知ってもらいたい、繋げたいと村田さんはおっしゃっていた。

そして最後に、私に、「子育ては楽しいし、助けてくれる人は必ずいるから大丈夫、もっといろんなコミュニティの子育て世代の話を聞いてごらん」とアドバイスしてくださった。そうか、確かに私は、ごく一部の声しか聞いてこなかったかもしれない。もっと、多様な「子育て」の考え方があるはずだ。もっと、多角的に声を集めてみよう、そんなふうにも勇気づけられた会だった。

久保田瑛

中谷明史さん(山ノ舎)

2024年1月12日(金)

中谷さんは、浜松のまちづくり界隈の人なら誰でも知っているであろう、新進気鋭の地域活性化に取り組む熱い人だ。浜松市北部の天竜区二俣町にUターンし、カフェやホテル運営など様々な事業を通じて地域活性化に取り組む。そして今は、さらに中山間地域の「熊」に家族で移住。地元の人たちとNPOを立ち上げ、かつて幼稚園だった場所にカフェと保育環境が併設される拠点を2023年から立ち上げている。私の中谷さんとちゃんとお話したのは、1年前、地元のビジネスコンテストに出場した時だった。同世代で自分の生活や暮らしをそのまま地域活性化に結びつけている中谷さんの活動に、勝手ながら親近感を感じ、どうしてもゆっくりお話ししてみたかった。まちなかで活動しているレッツと中山間地域で活動している中谷さん、私たちの「ローカル(自分たちの現在地)」について話したかったのだ。

中谷さんは地元の二俣町から4年前に熊に移住した。それは移住しなければわからないエリアの課題やエコシステムについて考えたかったからだという。1ヘクタール近くある家で鹿や猪もしょっちゅうあらわれるらしい。高齢化も進み、道を整備する人の手も足りないため、ケモノたちと

の境界が曖昧になってしまっている。そんな生活を送りながら、2人の子どもを育てながら、活動されていることに驚きを隠せない。

会場からは「なぜあえて中山間地域の活性化なのか?これから少子高齢化が進みどうしてもそういう地域は閉じていくしかないのではないか」という質問も出た。しかし中谷さんは、「緩やかに着地させたい」という。「確かにほとんどの中山間地域はたまたま運命にあると思う。しかし、自分は「残す意味」を考えたい」と中谷さんは続けた。「理由がないとその地域は残らない、だから自分は、熊という地域で誰もやったことがない新しいことがしてみたい。そして、地域振興プロジェクトやNPOの活動がうまくいけば他の中山間地域にも広げていけると思っている」そう話してくれた。

確かに熊は元々自治が強く耕してきた先人たちがいる歴史ある街だ。国道9号線沿いにあり、90年代に「くんま水車の里」という道の駅ができ、2000年に地元の女性たちが立ち上げた「NPO法人夢未来くんま」という地域づくりのNPOが誕生している。もともと新しいことを立ち上げたり、チャレンジをする機運があるエリアらしい。

何か新しいことにチャレンジすること、面白いことを全力でやってみること、それはレッツの活動と重なるところが多々ある。最後は会場の参加者を交えて、一緒に何かコラボ事業はできないか、中山間地域でデイサービスと一緒にやらないか、カラオケ喫茶と一緒につくらないか、など沢山のアイデアをお互い交わし、大いに盛り上がった。

レッツは浜松中心市街地であえて活動し、この街の姿を変えていきたいと思っている。なぜなら、多くの知的障害者施設は郊外に追いやられてきたという歴史があるからだ。一方、中谷さんはあえて中山間地域の存続が困難なエリアを変えていきたいと考えている。わたしたちは、エリアは違えど、やはり自分たちの「ローカル(現在地)」にかける想いは、同じ、方向性を向いている、そんな風に思え、同志を見つけて励まされた、そんな会だった

久保田瑛

大山浩司さん(ドリーム・フィールド)

2024年1月19日(金)

2004年2月、特定非営利活動法人として創設されたフリースクール

「ドリーム・フィールド」。不登校になった子どもたちや、発達障害を持つ子どもたちが、伸び伸び育つことのできる選択肢を少しでも多く用意する。そんなミッションを掲げた、“学校以外の”育ちの場である。同時に、「雑貨カフェいもねこ」「工房いもねこ」など、卒業後の居場所として、就労継続支援事業所の運営も行っている。

代表の大山浩司さんは、レッツとの関りも古く、トーク当日は「大山先生〜!」と再会を喜ぶひとの姿が多く見られた。人びとに慕われる大山さん、いったいどんな人物なのだろう。

トークはまず、大山さんの活動の軸にある「不登校」や「教育」についての話から始まった。そもそも、不登校は問題なのか？

不登校児童は10年連続で増加している。要因として、コロナ禍や「教育機会確保法」の浸透による意識の変化が考えられるのではないかと文科省は挙げている。「教育機会確保法」？それは、学校外での多様な学びの場を提供するための法律だそうだ。民間のフリースクールなど、学校以外の教育機関を確保する施策に対し、財政支援に努めるべし。また、学校が不登校の子どもやその家庭に対し、フリースクールの情報を提供する義務がある、ということ。しかし、わたしのような一般人はおるか、学校の先生でさえも、この法律を知らないというのが現状であるという。加えて、浜松市では、フリースクールとの連携はほぼ無く、“学校復帰”を目標としている。

学校は嫌々行くところ——つまり、厳しい社会を経験するのが学校だ、と思っているひとが、学校教育の場を運営している。よって、嫌々行くような学校になるのは必然ではないか。福祉も一緒ではないか？「国や社会に適應できるように鍛える環境」が、施設であり学校だと思われている。もっと言えば、学校がそういう場所だから、福祉に対してもそういう考え方になるのではないか。

いまの日本の教育の根幹には、「陶冶」という考え方が根付いてしまっている。陶冶というのは、内面ないし能力を”鍛える”ことを指す。これはもともと戦前・戦中の国体思想であり、排除に繋がる思想であって、教育の本質ではない。それが受け継がれてしまっているために、日本では民主主義が育たない。

そして話題は、大山さんの経歴へ移る。学校嫌いだったけれど、消去法で教職に就いたという。その後、どうして教師を辞め、フリースクールをつくることにしたのか？

例えば、初めて赴任したのが、スケバンみたいな生徒がたくさんいて、昼間に暴走族が入ってくるような学校だったこと。元気があって、面白

かった。学校の中で、先生に対して突っ張ってくるというのは、学校に期待をしていたということ。だんだん勉強ができる子が増えて、大人しくなっていた。今の子どもたちは、学校に期待していないのではないかと。学校以外に、はっちゃけられる場所が必要なのではないか。

例えば、会議で生徒の停学処分を問うときに使われる、「救う」「救わない」という表現に違和感を覚えたこと。学校に通うことで、救われるわけではない。学校をやめることで、かえって解放されることもあるのではないかと。

例えば、発達障害を持つ生徒を巡る出来事。もっと関われば良かった。自分がすべきなのは、進学のサポートではなく、そういう子どもたちと関わることでないかと。

教員という立場で学校に関わることで感じた、変化や疑問。そういうものにまっすぐ向き合った結果のフリースクール創設であり、それはとても自然な流れのように思えた（そして間違いなく必要なことだった）。

フリースクールを始めたのち、これも必要が生じて自然に立ち上がった就労継続支援事業所「雑貨カフェいもねこ」「工房いもねこ」。なるべく優しいお客さんにきてほしい、という思いから、大山さんが名付けたそう。「イカツイ兄ちゃんは“いもねこ”って言わないでしょ」と大山さんは笑う。

日本の「教育」は、何十年と活動を続けても、なかなかどうして変わらない。変わらないが、それでも訴え続けるしかない。そんな戦いの真っ只中に身を置いて、きびしく身体を張りながら、生きづらさを抱える子どもたちに、ひなたのようにあたたかい眼差しを送り続ける大山さん。トーク後は色んな人につかまってなかなか帰れなかったけれど、大山さんはひとりひとり、真摯に話を聞いていた。

教育は誰にとっても他人ごとではなく、現在進行形の課題なのだ。変わらないことを嘆いていても仕方がない。なぜなら、わたしたちの生きる社会は、そこからかたちづかれているからだ。わたしたちには一人ひとり、教育のいま・これからを考える責務があると感じた。

塚本千花

桐田和昭さんファミリー (DAN & paccauli)

2024年2月21日(水)

たけし文化センターの道を挟んで左隣にカレー屋のDAN、そして美容

室 paccauli の入ったビルがある。

DAN は、かつてはたけぶん裏の路地にある「肴町リトル」というシェア屋台に入っていたカレー屋さんだ。わたしが浜松に来た5年前くらいにオープンしたところで、色んな店のものをちょびちょび食べれるのが好きでよく行っていた。そこでダンさん（和昭さん）と知り合った。印象としては柔らかい笑顔の人だな~と思ったのを覚えている。リトルのイベントは普段場末の酒場などで飲んでいる私からするととてもオシャレに見え、勝手に近寄りたく思っていた。なのでその期間とても仲を深められた、という感じでもなかったが、散歩や何かの時に顔を合わせたら挨拶する顔見知りという感じだ。平子くんとお店に行ってカレーを頼んで、周辺を巡回しながらカレーを受け取りに行ったり。お互いこんにちは~と挨拶する、ご近所さんの。そう思うと、レッツとして旧知の中でもなく、お仕事での繋がりがあってもない。数あるちまちまトークでお呼びした人の中では一番「ご近所さん」だったのかもしれない。

そんなわけで、顔見知りではあるがどんな人なのか、と謎のまま挑んだトーク。主にはダンさんやパートナーのモエさんのお店を開く経緯や、最近初めて4歳のお子さんも連れ家族3人で行ったインド旅行の話などを写真を交えお聞きした。

一番印象に残っているのは、ダンさんは不思議なスタンスの方だということだ。まず「カレーがめっちゃ好きでカレー屋を始めたわけではない」ということ。インドカレー屋をやっている人って、みんなめちゃうちゃカレーに魅了されて始めるのかと思っていた。インドに行ったのも、お店を始めてから初めて行ったというから驚いた。今回の旅行で2回目。

ダンさんのカレーは所謂オーソドックスジャパニーズカレーではなく、南インドカレーというらしい。元々ファッションが好きでアパレルで働いて、たまたまカフェとアパレルがくっついたところで働く様になり、普通のカレーを作り始めた。その中で南インドカレーに出会い、美味しさに目覚め探究が始まったという。「その頃は南インド料理なんて全然世間にはなかったから、親や周囲に食べさせても知らないからわからない、辛いと言われ不安だった」とダンさん。しかしそんな不安を感じさせない笑顔。ダンさんの話を聞いていると、様々な「好き」と人が繋がって現在があるのだろうなと感じた。確かなこだわりを持ちつつも、色々な事象を穏やかに受け入れる、そんな印象を受けた。

ダンさんファミリーがそれぞれ活動しているビルも面白く、1階にカレー屋、2階にフリースペース、3階に美容室がある。2階のフリースペースは、今のところ広く貸し出しているわけではなく、お二人がいいなあと思った

方たちにポップアップを出してもらったりしているという。お花屋さんや食器屋さんなど、私も何回かお話ししたことがあるがとても丁寧でやわらかい、雰囲気のお店だった。そうして自分たちの暮らす地域で自分たちのいいなあと思う人たちの輪を広げていくことはレッツとも共通するところがあるなと思った。

また、ダンさんはずっと「人前でトークとかをしたことがないからうまく話せないかも」と言っていたが、そもそも今まで聞いてきた人が自己紹介がうますぎるのかもなと思った。そう思うと、自己紹介や活動紹介として資料があったりするのすごいのだ。もっとわたしが人を掘るのが上手ければ…!という欲望は湧いてきたが、まずはお近づきになり話を聞いてみる、そこからどんな人なのか、どんな活動をしているのかを深めていく。それがこれからのだ。それが「なかよくなる」ということかもしれない。ご近所さんとお話しできてよかった。これからが楽しみだ。

あと、今回希望してお店を出しているチャイを目の前で鍋で温めて提供してもらい、みんなで飲みながら話したのだが、関連する美味しいものを囲んでするお話はとてもよいものだ。南インド風チャイを飲み旅行記を聞くとなんだか少し情景を体感できる様だった。温かいもの、美味しいものはトークを柔らかくしてくれる。発表資料を見つづ話を聞くのも楽しいが、お茶を飲みつつみんながやんやと突っ込んでいくトーク形態はとても今回にあったと思う。途中息子さんのあっくんから感想が飛んだりするのも楽しかった。終わった後あっくんと追いかけてこをしたり、モエさんにパレスチナ支援のタグをもらってお話したり。どれもトークとは関係ないところにあるが、ここからこうして少しずつ自然な関わりがうまれてくるということなのかもしれないと思った。

高木 露子

